



世の中に絶えて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし (古今和歌集)

3月。進学、就職と多くの若者が故郷を巣立って行きます。鹿児島中央駅の新幹線ホームや空港ロビーが別れの風景に変わります。

多くの漢字の中で「志」はこの時季にふさわしい文字です。新たな門出を飾る「志」の意味は、心がある方向を目指して行くことなのだと言われます。卒業文集の中に一番多く見られるのも「志」という文字です。「志をはたして 一つの日にか帰らん 山は青き故郷 水は清き故郷」関東や近畿で行われる郷土会では、唱歌「ふるさと」を歌いながら懐かしいふるさとへの想いを語りま

す。何げなく眺めていた山も海も川も一緒に過ぎた友との思い出をいつまでも大切にしながら都会で生活してきた人々にとって、いちばん素直になれる場所がふるさとです。里山を散策すると、春を待ちわびているかのように枝を伸ばしている若木のそばに年

老いた桜木がひっそりとたたずんでいました。カズラの巻き付いた幹の一部は空洞になりながらも、精一杯みずみずしいピンクの花を咲かせるための準備をしているかのよう

です。春を忘れずたくましく生きている老木、そして今を時とばかりに咲く桜花。花の命の短さとともにこのけなげさが私たちの心を動かしてきたのでしょうか。

桜を歌った詩歌には名作がたくさんあります。

「世の中に 絶えて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし」。在原業平は、桜の花を、胸の高鳴りを抑えきれない愛しき人と重ねています。色もはつきりしない白い花ですが、人の心を波立たせるような不思議な魅力があるのが桜花です。

別れの季節です。若人たちにとって桜には格別の思い入れがあるのでしよう。お別れの歌として、多くの学校で「さ

くら」にちなんだ名曲が歌われます。

「さくら さくら——泣くな友よ 今惜別の時 飾らないあの笑顔で さあ」と歌手の森山直太朗さんは歌っています。

「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」春がめぐってくれば、桜の花はいつものように咲きます。少しばかりの感傷と不安、去る人、送る人、迎える人もなんとなく落ち着かない頃でもあります。「桜花が咲いている。精いっぱい咲いている。私も精いっぱい生きよう」

あちこちで桜の花はほころび始めています。

万物が動き出す躍動と希望の3月、旅立ちの時です。



指宿市長
豊留悦男